

第四章 運命の女神からの招待状

時刻は正午すぎ、ちょうどお昼どきだ。

だが、千鶴はまだパジャマのまま、キッチンのなかをうろつろしていた。

「十、九、八、七、六……」

チンッ。

千鶴のカウントダウンが終わらないうちに、オーブンレンジのタイマーが音を立てて切れた。

「あは、できたできたっ……」

ぱつとオーブンに飛びつき、いそいそとマカロニグラタンを取りだす。

ふわっと湯気が広がり、芳ばしい匂いが鼻孔をくすぐる。どうやら昨日のシチューの残りを利用してつくったものらしい。表面が、こんがりときつね色に焼け、いちおうは、おいしそうに見える。

千鶴がそそくさと席に着き、

「いったきまーす」

と、元気よくひとりごとを言ったそのとき、運命の電話が鳴った。

千鶴は、スプーンに伸ばしかけた手を途中で止め、目標をテーブルの端に置かれている携帯に変えた。

「はい、紺野です……。あつ、ゆり？　ね、ね、いまひま？　よかったら、これから……。えっ、いまデートのまっ最中う!?　はあーっ、それはそれは……」

……なによ頼みって、なーんか、やな予感……。

えーっ、なによそれえーっ!　どーしてあたしが……。餌も水も、休みの日には、自動で出るようにタイマー掛かっているんじゃないの?　……なら、どうしてわざわざ……」

……ふーん、満月の日にかぎって、かならず一匹いなくなるわけね。

で?　きょうは満月だから、ひましてるこのあたしに様子を見てこいって、そういうわけ?　いやよ。……確かに、すぐ近くに住んではいるけど……」

でも……あつ、ちよつと、ゆり!?　ゆ……」

千鶴は、のろろとした動作で、携帯を折りたたむとテーブルの上に置いた。しばらくは、呆然^{ぼうぜん}と自分の目の前におかれているグラタンを見つめていた千鶴だが、突然、怒りが爆発^{はくはつ}した。

「ゆりのバカア！　なによ、なによ、なあーんなのよお！　なんであたしが、わざわざ休みの日に学校に向^むいていかなきゃなんないわけ？　もう……」

ぶつぶつと文句^{もんく}を言いながら、千鶴は乱暴^{らんぼう}にスプーンを取り、グラタンをすくった。

ぱくつ。

「ん。んん!?　あぴいーつつ!!」

味^{あじ}など、まるでわからなかった。だが、それはけっして怒^{いか}りのためなどではなく、グラタンがあまりにも熱^{あつ}かったせいだ。

千鶴は、わけのわからない叫^{さけ}び声^{こえ}をあげて、流しへと走^{はし}っていった。もちろん、舌^{した}を火傷^{やけど}したためである。

グラタンは、たとえ表面に皮が張^はっていて見かけ上は冷^さめているように見えても、中身はまだ熱^{あつ}いことがある。そのことを千鶴は、ゆりの頼^{たの}み事^{こと}のせいで、すっかり忘れていたのだ。

水道の水で舌^{した}を冷^ひやし、目をうるうるさせながら、千鶴は思わずつぶやいていた。

「ひょうは、へっはいひゃふひふあふあ……。 (きょうは、ぜったい厄日^{やくにち}だわ……) 」

香^{かう}の匂^{にお}いがした。

おだやかな祝日の午後。

墓地^{きど}には人^{ひと}けがなく、寂^{さび}とした静けさがあつた。

かりんは兄の墓前にひざまずき、胸の前で手を合わせて静かに回向^{えこう}している。何を思^{おも}い、何^{なに}を祈^{いの}っているのか……。

ときおり微^{かす}かに吹く秋の風が、青いベレーからのぞいている彼女の前髪^{まえがみ}をわずかにゆらして去^さっていく。

人は常^{つね}に、人生という名の分岐点^{ぶんきてん}に立っている。瞬間、瞬間、無数に枝分かれしていく道を無意識のうちに選^えび取り、歩きつづけているのだ。

大きな分岐点もあれば、小さな分岐点もある。

もちろん、いま自分が、確かに人生の上の岐路きろに立たされていると、はっきり自覚している場合もあるだろう。

そしていま、かりんは気づいていたのかもしれない。人生最大の分岐点の前で立ちつくしている自分自身に――。

今なら、まだ間に合う。

今なら、まだ……。

……でも……。

お兄ちゃん、わたし、どうしたら……。

そのとき、制服のポケットに、着信を知らせる、携帯電話の軽い振動を感じ、かりんは立ち上がった。そして迷いを断ち切るかのように頭を激しく振り、携帯を取り上げた。

「……はい、琴宮です」

「あたしだよ」

「……………」

「これから、待ち合わせ場所を言う。一度しか言わないからよく聞きな」

「……………」

「戸越公園の池に架かっている橋の上、欄干らんかんのある大きなほうの橋だよ。そこに、二時ちょうど。五分以上は待たないからね」

「二時ちょうどに戸越公園の橋の上ね、わかったわ」

校内は、しんと静まり返っていた。

休日の学校というものは、どこかもの寂しい雰囲気ふんいきがただよっているものだ。それがたとえ、陽光きらめく真昼であったとしても。

午後二時を告げる鐘かねの音が、がらんとした教室に響きわたった。そのチャイムの音を合図あいずに、テスト用紙に向かうものが約一名――。

浩一である。

机の上には、ワープロで作成されたと見られる、数学のテスト用紙が一枚のついていた。

暑くもないのに、額ひたいに汗を浮かべている浩一のとおり、いつもなら、かりんが

すわっているはずの席にいるのは、相原だ。きょうの相原は、アールジーンの下
 ニムに、白いブラウス、その上に青を基調としたゴブラン織りのベストという、
 清楚で活動的な、いかにも彼女らしい着こなしてまとめている。

試験開始から、二十分が経過した。

それまで脚を組み、頬杖をついて、浩一の奮闘ぶりを見守っていた相原だった
 が、ふいに腕の時計に目をやり、眉をくもらせた。

「紺野くん、どうしたの？ まだ、一問も解けてないみたいだけど、大丈夫？」

「……………」

問題は、たったの二問。理科は得意だが、なぜか数学は苦手という浩一のため
 に、相原がつくった問題は、一見すると、まるで物理の試験問題のようだった。
 内容を簡単に説明すると、恒星間航行のできる宇宙船が、1G加速をつづけた
 まま、アンドロメダ大星雲まで行きつくのに要する時間を、対数を使って求める
 問題が、問いの一。

問いの二は、宇宙船内の経過時間から、地球での経過時間を逆算する問題であ
 る。もちろん、かの有名な、アインシュタインの相対性理論により、地球時間と、
 宇宙船内の経過時間には、大きなずれが生じてくる。アンドロメダ大星雲までの
 距離、加速度G、光速速度などは、提示されているので、対数の公式さえしつかり
 おぼえていれば、さほど難しい問題ではない、はずなのだが――。

あぶら汗を流しながら煩雑な計算をつづけている浩一を見るに見かねてか、相
 原がささやいた。

「紺野くん、ヒント教えてあげよっか？」

相原の思わぬ言葉に、浩一の動きがピタツと止まった。

「ヒントって？」

相原は、浩一の瞳をじっと見つめたまま答えを返した。

「そうね、美香に、やさしくキスしてくれたら、おしえてあげる」

「……………わかった」

浩一は、机に片手をついて立ちあがった。

椅子にすわったままにいる相原のあごに手を添え、くいつと上向かせる。そし
 て、そのままゆっくりと顔を近づけていく。

「え？」

相原は、切れ長のひとえをめいっばい見ひらき、あわてて言をひるがえした。
「きやあ、きやあ、じょうだんよ。紺野くん、じょうだんだってば……」

浩一は、くちびるとくちびるが、ふれあう寸前で動きをとめ、すつとからだを離した。

ほつと、安堵の息をつく相原。

「先生、おれ、これでもまじめにやってるつもりなんだぜ、邪魔しないでくれよな」

浩一はそう言いつつ、不機嫌そうな顔で席についた。

「あは、ごめんね。もう変なこと言ったりしないから」

「つたく……。だいたい、対数なんて二年で習うはずのモノなのに、何で今やんなきゃならないんだよ」

ぶつぶつと、小声で不平をもらす浩一の言葉を耳にして、相原がすかさず反論する。

「理系を選んだ紺野くんがわるいのよ」

「うつ……」

浩一はじろつと相原をにらみつけ、言った。

「ただの独り言なんだから、いちいち反応しないでくれよ」

「ひとりごとだったの？ 美香はてつきり……」

「くつ、気が散るからとにかく黙っててくれ！」

「はいはい」

わるびれた様子もなくそう言い、いったんはそのまま黙り込んだようにも思えた相原だったが、ものの一分もたたないうちに――。

「美香、喫茶ミ・ルフィのシフォンケーキが食べたいなあ」

「……………」

「帰りに紺野くんがおごってくれるって、約束してくれれば美香だって、それなりに考えるんだけどなあ」

相原はそう言つて、浩一の顔をじーつとのぞき込んだ。

「……先生、それってもしかして、ワイロの要求？」

「さあ、美香なんのことだかわかんない」

「ちつ、わかったよ！」

「うふふ」

相原は、まるでデートの約束でもとりつけたかのような感じた。きらきらと輝く瞳で浩一を見つめている。

「ミ・ルフィのシフォンケーキだな！」

「きやあ、やったあ！」

しかし浩一は、無邪気によるこぶ相原を見やりながら、一言クギを刺した。

「でも、もし、使えないようなヒントだったら、この場で先生を押し倒しちゃうからな」

「え？」

浩一のもうにもきわどい台詞に、相原は呼吸を止めて数秒ほど考え込んだ。が、すぐに、にこっと微笑み、言葉を返した。

「いいわよ」

「それで？」

内心どんなヒントをくれるのかと期待しながらも、浩一はあくまでさりげなく尋ねた。

「紺野くん、単位を秒でそろえて計算してるでしょ？ それじゃあ、明日の朝までかかったってできっこないわよ。計算するとき、すべてを年でそろえてもらいなさい、すぐにできちゃうんだから」

「！」

浩一は、黙って問題用紙に目を通し、シャープンを持ちなおした。

「あと、二十七分。まにあうかしら？」

祝日ではあったが、公園内は閑散としていた。

やや弓なりに弧を描いた橋の上、かりんの前に他校の制服——グリーンのブレザーに身をつつんだひとりの少女が立っていた。

年齢は、かりんより一つないし二つ上といったところだが、まどっている雰囲気はかなり大人びている。

「今度こそ、本物なんでしょうね？」

かりんはそう念を押しながら、少女から、かなり重量のある紙袋を受け取った。

「……さあね」

少女の言葉に、かりんの表情がさつと険しいものへと変化する。

「冗談だよ。今度こそ本物だから……。でも、悪く思わないでよ。警察の囲捜査
おとりそくさ
つてこともじゅうぶん考えられたし、第一、かりんが本当にそんな物を必要とし
てるんだってことじたい、なかなか信じられなくってさ」

「……………」

「そんなことより、かりんはそれの扱い方、わかるのかい？」

「以前アメリカに行ったとき、遊びで射撃場に入ったことあるから」

「なら、いいけどさ……。ま、いつ誰を殺るつもりなのかは知らないけど、頑張
りな」

「……………うん」

かりんは、くちびるをきゅっと引きむすび、うなずいた。そして、数秒ほど間
ま
をおいたのち、少女の瞳をのぞき込んで、ややためらいがちにたずねた。

「あの、訊いてもいい？」

「なんだい？」

「……………あなたの、本当の名前」

一瞬、少女の表情が硬くこわばった。

が、すぐに緊張を解いて顔を上げると、空を仰ぎ見るようにして答えた。

「十六夜静流」

それが、本名なのかどうか、かりんには確かめる術がなかったが、信じてもし
すべ
いような気がした。

「そっか、静流ちゃんて言うんだ」

「……………」

「名前、教えてくれてありがとう。絶対だれにも言わないから」

静流は、かりんの顔をじっと見つめ、言った。

「わかってる……。それより、ちよくちよくメール出すから、ちゃんと返事よこ
しなよ」

一瞬ことばにつまり、かりんは黙ってまっげを伏せた。

「かりん……………」

「じゃあね、静流ちゃん……………」

かりんは、ものといたげな静流の視線を無視するように歩きだした。

「そいつは、あんたが自分自身の手で未来を切り開くために譲ったんだ。自殺の道具なんかに使ったら、承知しないからね！」

きびしい調子の声だった。だが、自分のことを本気で心配してくれているところが伝わってきて、かりんは胸が一杯になった。

「……うん、約束する」

かりんは足を止め、静流をふり返って微笑んだ。

「また、会おうね」

校内の北のはずれ、びっしりと蔦に覆われた書庫の裏に、その小屋は建てられていた。前面に金網が張られた、かなり古い造りの鳥屋である。小屋は、真ん中でふたつに仕切られてい、右側にはうさが、左側には鶏が入れられていた。

小さな獣たちは、何かに怯え、小屋の隅に身を寄せあつて震えている。そして、その小屋の前。まっ白い羽根が、あたり一面に散乱しているそのなかに、男が一人、背をかがめてうずくまり、飢えた野獣のように、まるまると肥った雌鶏の腹に食らいついていた。

食われている鶏は、まだ生きているのか、ときおりひくひくと痙攣をおこし、力なくくちばしを動かしている。とさかが妙になま白い。大量の出血のため、血の気が失せてしまったのだ。

スーツに返り血が飛ぶのもかわらず、その長身瘦躯の男は、ががつと臍もつをむさぼりつつづけている。黒いセルぶち眼鏡の奥で、三白眼の血走った目が、ぎらぎらと暗い光をはなつ。鬼気迫るといふ形容がまさにぴったりとくるような顔だった。男の食っている肉が、人間のそれだったとしても、なんの違和感もなかったらう。

書庫のほうで、微かに落ち葉を踏みしめるような音がし、不意に男の動きが止まった。

蔦の絡まる、古い書庫の陰から現れたのは、千鶴だった。

千鶴は、右手に青果店のロゴが入った白い袋を下げている。一応、規則なので制服は着ていたが、ベレーはかぶっていない。

ねつとりと絡みつくような異臭に、千鶴は思わず顔をしかめた。

「これって、なんの匂い？」

千鶴は、ふと、自分が目指している小屋の前に誰かがうずくまっているのに気がつき、足を止めた。その誰かは、背を向けているので、何をしているのかまではわからない。だが、本能からか、その場に漂っている異様な雰囲気だけは敏感に感じ取っていた。

千鶴は、少しいぶかしげな表情を浮かべ、男の背格好から、心に浮かんだ人物の名前を呼んでみた。

「……横井……せんせ？」

名前を呼ばれた男はゆっくりと顔を上げ、振り向いた。

その男は千鶴の推測通り、確かに戸越高校教諭の横井だった。

が――。

横井は薄い唇の端から、血と卵黄の入りまじった唾液をだらだらと滴らせている。そして、異様なまでに長い舌が、だらりと垂れ下がり、口のまわりにべとりとついた、血と脂と羽毛とをまるごと舐めとりはじめた。

「ひっ……」

千鶴のからだに戦慄が走った。そして、あたりに漂っている異臭の正体が何であるのかを理解した。

横井の、背筋が凍りつきそうになるほど冷たい視線。人間のものとは思えないほど長い舌。あたりに散乱している鶏の羽根。そして、血の匂い。それらがいったい何を意味するのか、また、横井がここで何をしていたのか。

――などといったことは、今の千鶴にはどうでもいいことだった。

とにかくこの場を離れようと、後ずさりしはじめたのだが、恐怖のため、足がすくんでしまっと思うように動かない。

横井が、不気味な笑みを顔に張りつかせたまま、ゆらりと立ちあがった。

かりんは正門を目の前にして、ひとり佇んでいた。

ときおり吹く秋の風が、青いベレーからのぞいている前髪を微かにゆらして去っていく。

ふいに、かりんは右手に下げていた学生靴から、鈍く光る拳銃を取り出した。コルト・ガバメント。四十五口径の大型自動拳銃である。重量があるぶん反動も大きく、やや扱いづらいが、威力のほうは申し分ない。

かりんは、つかのまその銃を見つめていたが、やがて静かに目を閉じ、つぶやいた。

「お兄ちゃん、きっと仇はとるからね」

かりんは顔を上げ、わずかに滲んだ涙を振り払うと、鉄製の重い扉を開けて校内へと入っていった。

千鶴の悲鳴がかりんの耳に届いたのは、まさにそのときだった。

「ちいちゃん!」

かりんは鞆を投げだし、手にしていたコルトのスライドを引くと、急いで声のした方へと駆けだした。

相原は、赤いサインペンで、テスト用紙に大きな丸をふたつ描いた。

瞬間、浩一は、ふうっと、大きく息をつき、机の上に突っ伏した。どっと疲れがでたような気がした。

「このまま、明日の朝まで眠っててもいいかな、先生？」

相原はくすつと笑って言った。

「そんなに疲れた？」

「疲れた。おもいつきり」

「ちよつと、職員室まで行って荷物を取ってくるから、それまで眠っててもいいわよ」

「ついでにトイレ、だろ？ 先生」

相原は何も言わずに浩一の頭をかるく小突くと、それまで使っていたかりんの机をきちんと整え、教室を出ていった。

ひとり残された浩一を、静謐がつつみこんだ。

相原は職員室を出ようとして、ふと立ち止まった。照明を落としていくかどうかで迷ったのだ。

通常、戸越高校では、すべての教室、廊下、及び地下運動場の照明は、時間により、自動的にONとOFFがなされるようになっていた。

すなわち、朝夕それぞれ七時になると、かつてに照明がついたり消えたりするのだ。たとえ、その場所にだれ一人いなくても、である。

無人の教室や運動場などに、煌々^{くわくわく}と明かりがついているのは、はつきりいつて浪費以外の何^{なに}ものでもない。

だが、この高校には、地下水の流れを利用した自家発電装置があるうえ、廊下^{ろうか}の照明以外は、それ自体に段調光センサー^{だんちやうきやうせんさー}（まわりに人がいないときはほのかに、人が近づくで一〇〇%の照度になるよう点灯させるためのもの。もちろん、教室ごとに照明のON・OFF、及び明るさの調節も可能）がついているので、そのことを気にするものはほとんどいなかった。

相原はしばし迷^{まよ}ったあげく、そのまま職員室を出^でた。ごくまれにだが、休日に部活などで学校を利用する生徒もいるからだ。いきなり、地下運動場などで照明が落ちれば、それこそパニックになる。

ドアに鍵をかけた相原は、くるつと踵^{かか}をめぐらし、浩一の待^{まち}つ教室へと急いだ。た。

「……先生」

「さ、そろそろ帰りましょ」

相原は、そう言つてにつこりと微笑^{ほほえ}み、浩一の前に答案用紙を差しだした。

「ほら、大事なものを忘れていつちゃダメよ」

「ん……」

そのとき、午後三時を告^つげるチャイムが鳴った。

鐘^{かね}の音^{おと}が鳴り終わるのを待^{まち}って、浩一が言う。

「先生、ありがとう。先生がヒントくれなきゃ、たぶん零点だったと思うし……。せつかくの祭日^{やすみ}なのに、わざわざおれみたいなのにつきあってくれて、感謝してる」

「そうよ、きょうは勤労感謝の日なんだから、おもいつきり感謝してほしいところよね。と、いうことで……」

相原は、期待いっぱいの瞳^{ひとみ}で浩一の顔を見つめ、返事をまっている。

「わかつてる。ミ・ルフィのシフォン……」

そのときだった。

教室の外、どこか遠くのほうからその悲鳴は聞こえてきた。

絶命は必至というほど、せっぱ詰まった感じが、その声からは伝わってくる。

「千鶴!」

「え?」

浩一は、直感的に悲鳴の主が誰なのかを悟り、椅子を蹴って駆けだしていた。

「ま、まって紺野くん、今の悲鳴は……」

相原の声を背中に聞きながら、教室のドアを開け、廊下に出る。

いやな胸騒ぎがした。自分の知らないところで、何かがひそやかに進行しつつある。そんな感じだった。

浩一が、三段抜かしで階段を駆け下り、正面玄関から外に飛び出したそのとき。乾いた銃声が、あたりに響きわたった。

浩一がそこに駆けつけたとき、ことはすべて終わったあとだった。

小屋の前には、血まみれの鶏の死骸と、うつぶせに倒れている男の死体の一つ。そして、少し離れたところに、放心状態のかりんと千鶴が立っていた。

全力で走ってきたため、はあはあと息をきらしているにもかかわらず、ふたりとも、浩一の存在に気づいた様子はない。

「千鶴!」

名前を呼ばれたことで我にかえたのか、千鶴はゆっくりとふりむいた。

「……浩一?」

まだ、なぜ浩一がここにいいのか、という疑問までは頭に浮かんでこなかったが、その存在はみとめることができたようだ。

浩一は千鶴に駆け寄り、早口でたずねた。

「いったい何があったんだ?」

「わかんない、あたしにも何がなんだか、ぜんぜんわかんないのよ! 横井先生が、にわとりを……生きたままのにわとりを食べて……。それで、それから、かりんちゃんに来て、それから、それから……浩一……」

浩一は、ことは途中で泣きだしてしまった千鶴を抱きしめてやりながらも、視線をかりんに向け、呼びかけた。

「かりん！」

しかし、反応がない。浩一は、千鶴からそっと離れ、かりんに近づいていく。
「な……!？」

そのときになってようやく、浩一はかりんが手にしている拳銃コルトに気がついた。
「じゃあ、さっきの爆竹ばくちくが破裂したような音は、銃声だったのか？」

浩一はかりんの前にまわりこみ、肩を両手でつかんで、からだを軽くゆさぶってみた。

「……かりん？」

だが、その瞳ひとみは色を失ったままだ。焦点が合っていない。

「しっかりしろ！ いったい何なにがあったんだ？ かりん！」

肩を激しく揺ゆさぶられ、ようやく浩一の存在に気づいたかりんは、とぎれとぎれに言葉を押しだした。

「……浩ちゃん。わたし……おねがい信しんじて、わたし、ただ……お兄ちゃんの……
仇かたきをとっただけ……」

「かたき？ 仇かたきっていったい……」

「それは……」

深い愁うれいに沈んだ表情を隠すかのように、うつむいてしまふかりん。

「きやつ！」

傍かたわらにいた千鶴が、ふたたび悲鳴を上げた。

浩一が、ふり返って訊きく。

「どうした？」

「動いたの、今、たしかに動いたのよ。横井先生、まだ生きているんだわ！」
「え？」

浩一たちの視線が、うつぶせに倒れているはずの横井に集中した。
そのときだった。

「くつ、くつ、くつ、くつ、くつ」

まるで、冥界めいかいの底知れぬ闇そこの中から響いてくるような、しわがれた笑い声。それが、今まで死んでいるとばかり思っていた横井の口くちから、洩もれでてきたのだ。

浩一は、倒れている横井に近づこうと、足を一歩踏みだした。が、かりんに腕つかまれ、思いのほか強い力で引き戻されてしまった。

「近寄^{ちかよ}っちゃだめ、あいつは、あいつは、人間じゃないのよ！」

「なっ……どういうことだ？」

「浩一いつ！」

千鶴のわななき声に、気配^{けはい}を感じ、浩一がふりむく。

「知りたければ、教えてやろう……」

そう言いつつ、腕をだらつと垂^たらしたまま亡者^{もっじや}のように立ち上がったのは横井であつた。

「もつとも、知ってしまったら後悔することになるがな」

眼鏡^{めがね}をむしり取るようにして投げ捨て、横井が吼える。

冷酷で陰湿、邪気に満ちた双眸^{そうぼう}がそこに現れ、浩一たちを睨^ねめつけていた。

今、浩一たちの眼前^{がんぜん}で、小春日よりの休日という日常からは、あまりにもかけ離れた状況が展開しつつあつた。

三人は、浩一を中心にひとかたまりになり、数メートルの距離をとって、横井と対峙^{たいじ}している。しかしすぐに、横井のぞつとするほど異様な迫力に圧倒され、じりじりと後退しはじめることになった。

そのとき突然、浩一の脳裏に、閃光^{せんこう}となつてひらめいた言葉があつた。

——殺^やらなければ、殺^やられる！

それはもはや、予感などという生易^{なまやさ}しいものではなく、確信だつた。

「かりん、銃^{そいつ}をかせっ！ おれが殺^やる！」

「え？」

「いまいち話は見えないが、おれはかりんを信じる。あとは、おれに任せろ！」

浩一は、かりんの右手を掴^{つか}んでコルトを取ろうとした。だが、かりんは素直に応じようとはせず、浩一の腕を振り払つた。

「だめ！」

「かりん!？」

「……わたし、浩ちゃんを巻き込みたくなかつた。だから、このことないしょにしておいたのに……なのになんで、なんで浩ちゃんが今ここにいるのよ！ どうしてこんなときに学校に来ちゃつたのよ！ 浩ちゃんの、浩ちゃんのばかあ!!」

「ばかつて……何わけのわかんないことで怒ってんだよ。いまがどういう状況か、わかつてんのか？」

「わかってるわよ！ わかってるから怒ってるんじゃない！」

「いいから、そいつをかせて……」

「いやっ！」

「あーっ、もう。ふたりとも、いいかげんにして！ 今はそんなことしてる場合じゃないでしょ！ ほらっ、はやく逃げなきゃ……」

千鶴がふたりの手を引っぱり、その場から逃げだそうと身体からだの向きをかえた。そのとき。

「あの……」

「きやつ!？」

いきなり誰かだれにぶつかってしまい、千鶴は思わず悲鳴を上げた。

「……相原先生!？」

目の前に現れた人物が誰なのかを悟り、かりんが驚いたように言う。

「さっき、悲鳴が聞こえたんだけど、貴女あなたたち?」

「……あ、はい」

と、相原の問いに、千鶴が緊張した面持ちおもてで答える。

「大丈夫？ 悲鳴の原因はなに?」

そこまで言つて、ふと横井の存在に気づいた相原は、ぎよっとなった。

「よ、横井先生!? どうなさったんです、顔つきが……いえ、お顔の色が、その……。あの、ほんとうに横井先生でいらっしゃいますよね?」

横井とは受け持つ学年が異ことなっているせいもあり、それほど頻ひん繁ぱんに顔を合わせていたわけではない。それゆえ、その異様な相貌そつぼうに驚いた相原がそうたずねたのも無理はなかった。

浩一たち三人は、相原の言葉で再び横井に注意を戻した。と、同時に、横井の口くちからほとばしりでる声を聞くはめになった。

「ぐうううう、ぐはあつ、が、があああ」

それは、通常の人間が出だしうるとは到底思えないような不気味な唸うなり声だった。

「……よ、横井先生?」

今ここで起きたことなど何も知らないはずの相原だったが、完全に常軌を逸しはじめた横井の様相にそれ以上は近寄ることができず、その場から小声で呼びかけるにとどまった。

だが――。

「……やあ、これは、これは、相原先生じゃありませんか」

相原が同僚の教師であることに気づいた横井は、それまでの表情を瞬時に変え、言った。

思いもかけず、横井からまともな返答をもらった相原は、面食らって言葉に詰まった。

「あ……」

「ちょうどいい時に来ました、はやく警察に連絡を……」

「え？」

「その生徒の手にしているものが目に入らないのですか、相原先生」

横井に指摘され、はじめて、相原はかりんが手にしている銃に気がついた。

「それを、何処で手に入れたのかはわかりませんが、本物です。それでいきなり私を撃ったのですよ。幸い、急所は外れてくれたので、命に別状はありませんがねえ」

横井はゆがんだ笑いを浮かべながら、自分の胸を指さした。

その横井の言葉に、相原の表情がいつになく厳しいものへと変わっていく。

相原は、かりんに向きなおると、その瞳をまっすぐに見据えて問いただした。

「琴宮さん、それ、ほんとうに本物？ 横井先生が言ったように、それでほんとうに先生を撃ったの？」

相原の矢のような質問に、かりんは激しく首を振って叫んだ。

「先生、だまされないで！ あいつは人間じゃないの……あいつが、あいつがお兄ちゃんを殺したんだからあーっ！」

後半は、ほとんど絶叫に近かった。

そして、次の瞬間。かりんの掌中のコルトが火を吹いた。

パンッ！

「きゃっ」

相原が小さく叫び、手で顔を覆った。

銃口から、微かに硝煙が立ちのぼり、風に運ばれて消えていく。

弾丸は、確かに横井の胸を撃ち抜いていた。それゆえ誰もが、地面にくずおれる横井の姿を思い描いた。だが、横井は倒れなかった。

「どうして？ だって、たしかに胸にあたったはずなのに……」
かりんが、呆然とした顔でつぶやく。

もはや、浩一も千鶴も、ただその場に立ちつくし、事の成りゆきを見守るほか、すべがなかった。

かりんのつぶやきを耳にして相原が恐るおそる顔を上げる。

「よ、横井、先生……」

しかし横井は、相原の呼びかけなどまるで聞こえなかったかのように、嘯いた。
「くつくつくくく、ここまで、目撃者が多くなってしまうては、もはや考えを変えねばなるまい。皆殺しだ！」

そして、それは始まった。

横井の全身が、かたかたと小刻みに震えだし、顔面の筋肉が奇妙にひきつれていく。唇の端が、ばっくりと裂け、ぎしぎしと、骨がきしむような音をたてて顔の骨格そのものが急速に変貌していった。と、同時に、指がねじくれ、剛毛が全身を覆っていく。

もはや、横井の顔は人間のそれではなかった。

驚愕と戦慄。

誰もが、金縛りにあったように身動きひとつとれず、眼前の恐怖を凝視しつづけている。

そんな状況下でありながらも、最初にその枷をはねのけ、呪縛から自由を取り戻したのは、かりんだった。

「いやああああああっ！」

パンツ！ パンツ！ パンツ！

それは、かりんの絶叫と銃声による悲劇のプレリュードだったのかもしれない。かりんの撃った弾丸のすべてが、吸い込まれるように横井の軀へと消えてゆき、そのうちの一発は、見事に眉間を撃ち抜いていた。にもかかわらず、横井は薄ら笑いさえ浮かべ、平然と突っ立っている。まさに怪物だった。

「そんな……。どうして、どうして死なないの？ 頭にあたってるのに！」

かりんは、自棄になって残弾すべてを撃ちつくした。しかし、結果は変わらなかった。

「こんな、こんな事って……」

「あいつが、本物の狼男なら、そんなもの役には立たない」

「役に立たないって、じゃあ、どうすれば……」

かりんの手からコルトがすべり落ちた。

「きまってるんだろ、逃げるんだよっ！」

浩一は言うがはいか、かりんの手を掴み、身を翻して駆けだした。

「こ、浩一い、置いてかないでよぉ！」

千鶴があわててふたりの後を追ひ、ワンテンポ遅れて相原がつづく。

「ま、まって、紺野くん……」

校舎から校門まで、うねるように続いている石畳の上に出たところで、浩一はいったん立ち止まり、背後をふり返った。すぐ後ろに、千鶴と相原がついてきているのを確認する。が、追いかけては来なかったのか、横井の姿は見えない。

かりんは、ふたりが追いつくのを待つわずかの間に、石畳の真ん中に落ちていた自分の鞆を拾って脇にかかえこんだ。

「浩ちゃん……」

かりんから不安そうな声で呼びかけられ、浩一はふり返って答えた。

「とにかく、人目のあるところまで逃げ切れれば一息つけるはずだ。そのあとどうするかってことは、そのときにじっくり考えればいい」

「うん」

校門までたどりついた浩一は、半開きになっていた門扉を内側に引っ張り込み、女性たち三人に、先に外に出るよう促した。

「はやく！」

浩一のすぐ後ろを走っていた千鶴が、まず門を通り抜けようとした。

だがその瞬間、まるで、何かに弾かれてもしたかのように、後方に吹き飛ばされてしまった。

「きゃっ!？」

ぶざまにひっくり返ることだけは、辛うじてまぬがれたものの、その場にしりもちをついてしまった千鶴に、浩一の叱声が飛ぶ。

「千鶴、なにやってんだよ。後がつかえてんだから、はやく……」

「まって浩ちゃん、なにか変！」

千鶴を助け起こしながら、かりんが言う。

「変^{へん}ってなにが？」

怪訝^{けげん}そうな顔つきで聞き返す浩一に、相原が、横からかりんにかわって答えた。

「空気が、かげろうみたいに、ゆれて見えた気がするの」

「空気が？」

相原は、門あたりの何も^{なに}ないはずの空間に向かって、ゆっくりと手を突きだした。

指先が、学校の敷地内と校外の境界あたりまでのびる。と、そのあたりの空間が、水の上に広がる波紋^{はもん}のようにゆらめいて見えた。

「なにか、目に見えない壁でもあるみたい」

浩一は眉根^{まゆね}をよせながら、相原に倣^{なまら}って手をのばした。

「……なんだ？ ほんとうに何かある」

つかのま躊躇^{ためら}ったのち、浩一は両手をその見えない壁に押しつけ、体^{たい}をあずけてみた。

「そんなことって……」

千鶴がつぶやくように言う。

浩一の軀^{からだ}は、空間障壁とでも言うべき存在^もで支えられ、あり得ない角度のまま宙に静止していた。

「もしかしたら、魔法の結界みたいなものなんじゃ……」

「馬鹿な！ 結界だって？」

浩一は、かりんの言葉を否定するかのように、いったん体勢をととのえてから渾身^{こんしん}の力を込めて“壁”を押してみた。が、やはり、それを突き抜け、外に出^でることはかなわなかった。

「こ、浩一、はやく、はやくなんとかしないと……」

「言われなくなっただけわかってる！」

浩一は力まかせに拳^{こぶし}をくりだし、それでも埒^{らち}があかないと知ると、おもいつきり、体^{たい}当たりしてもみた。だが、結果は変わらない。千鶴のときとおなじように跳ね返^{かえ}されただけだった。

「くそっ！」

「ねえ、どこか、ほかの場所から外^{そと}に出^でられないかしら？」

さすがは数学の教師というべきか、相原は、冷静に状況を判断してそう言った。だが、そのとき。

「無駄なことは止めたほうがいい」

浩一たちが、どうしても通り抜けることのできなかった「壁」の向こう側からその声は聞こえてきた。

見ると、いつのまに先まわりしたのか、門の外に変身を解いて人の姿に戻った横井が立っていた。

横井は、手にしていたコルトを放り投げてよこした。

「忘れ物だ」

顔の正面で、浩一は投げつけられたそれを受けとめた。

「……………」

浩一は、しばし無言で手のなかのコルトを見つめていたが、やがて、それを横井に向かって投げ返した。

しかし、その銃は「壁」に阻まれて地に落ち、乾いた音をたてて石畳の上を滑っていった。この結界をつくりだしたのが、横井であるということは、もはや疑いようのない事実だった。

現時点で、浩一たちに残された生き延びるためのもつとも有効な手段は、ふたつあった。

ひとつは、なんとか外部と連絡を取り、助けを求めること。そしてもうひとつは、この閉じられた空間のなかで、横井を倒すための方法を見つけだし、それを実行すること。

しかし、どちらを選んだとしても、失敗した場合は、あまり考えたくないような結末を迎えることになるだろう。

浩一は、躊躇せず行動にでた。

「逃げるぞ！」